

東洋の叡智

前田 專 學

I まえおき

ただ今ご紹介を頂きました東方学院長の前田でございます。この度は九十年もの長い伝統をもつ人文学会の講演の講師としてお招き頂き、皆様にお話しする機会が与えられましたことは、私にとりまして、まことに光栄であり、また大きな喜びでもあります。このような有り難い機会をお与え頂きました野村邦近人文学会会長並びに仲介の労をお執り頂きました川久保宏衛人文学会運営委員長のご高配に心から厚く御礼申し上げます。また磯水絵研究委員長をはじめご関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。さらに本日はご多忙中にもかかわらずご出席いただきました皆様方にも厚く御礼申し上げます。

さて、二松学舎大学は、陽明学に立脚する経世家で、明治漢学界の長老であられた三島中洲先生が創立された大学であります。漢文学と国文学を二本の柱として東洋学の確立を目指して創立されたと仄聞しております。私は目下、二松学

舎大学とは縁のある足利市の史跡足利学校の庠主をしておりまして、石川学長先生には、最近では毎年、足利学校のアカデミーで漢詩の講義をして頂いております。今年はさらに、毎年十一月二十三日に行われます恒例の釋奠の記念講演をお願い致しております。昨年は、戸川先生に記念講演をお願いいたしました。

只今、私は足利学校の「庠主」であると申しました。「庠主」という言葉は、今では死語といってよく、時々何と読むのですか、と訊かれます。「庠主」の「庠」は学校を意味します。したがって庠主とは校長とか学長を意味するそうでありま
す。庠主の「庠」は、まだれに羊と書くのですが、これがちょっとの違いで、やまいだれに羊となりますと、痒い、となり、隔靴搔痒というときの痒ということばになってしまいます。

この庠主という職は、十五世紀、室町時代に、関東管領上杉憲実（一四一〇～一四六六）によって足利学校が再興されたときに制定されたということがあります。初代の庠主は、上杉憲実が一四三九年に鎌倉から招いた快元という禅僧で、その後明治二年尾張名古屋出身の第二十三代謙堂まで続いたということです。庠主は、正月の十四日か十五日には、かならず江戸城に行って、將軍に新年の挨拶をしなければなりません。十六日には、「年筮ねんざい」^{ねんざい}といって、將軍のその年の吉凶を判断して、將軍家に献上することになっておりました。これが幕府に対する庠主の公の務めでありました。

足利学校には、僧俗の学ぶものが多く、十六世紀には、学徒の数三千といわれ、事実上日本の最高学府となり、戦国の世にも読書の声絶えなかつたといわれています。大変に興味深い事実は、十六世紀、日本にはじめてキリスト教を伝えたいイエズス会のフランシスコ・ザビエル（一五〇六～一五五二）がこの足利学校の存在を知っていたことでもあります。これは、天文十八（一五四九）年の書簡で、「ミヤコから遠く離れた坂東（関東）と呼ばれる地方には、日本でもっとも大きく、もっとも有名な別の大学（下野の国の足利学校）があつて、他の大学よりも大勢の学生が行きます」（河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡三』東洋文庫、一九九四、百二十九頁）と、世界に紹介しました。

しかし江戸時代の末期には、藩校へと移行し、明治五年をもって廃校となってしまいました。しかし大正十(一九二二)年に、足利学校跡は、國指定史跡となり、昭和六十三(一九八八)年に建物の復原工事に着手し、平成二(一九九〇)年には江戸時代中期の姿に甦って、今日に至り、庠主の職も、平成六年八月、私の恩師の中村元先生をお迎えして、復活したのです。

足利学校は、百石の領地を貰って幕府の保護を受けている幕府立の学校でしたので、今日言う「国立」の学校であり、その庠主もそれなりの格式がありました。現在の庠主の職は、足利市の条例で定められており、市議会の承認が必要ですが、足利学校の祭事、文化事業、渉外などに関する指導、助言などを行うことになっています。私如きものでもなれるのですから、江戸時代に比べますと、大分格が落ちていると思います。

足利学校最大の行事は、毎年十一月二十三日に足利学校の孔子廟で行われる孔子とその弟子たちのお祭り、「釋奠」であります。今年も三日後には足利市長が中心となって行われます。皆様よくご存じのように、「釋」も「奠」も供え物を置く、並べるという意味です。中国の唐(六一八〜九〇七)の時代に始まり、はじめは、春夏秋冬に行われたようですが、のちに春秋二回となりました。日本では、すでに奈良時代にあったようです。足利学校の釋奠の起源については、三つほど説がありますが、はっきりしたことは不明です。

現在行っている釋奠は、明治十三(一八八〇)年に、国の補助などによって、遺跡の大修復が行われたのを機会に、冬至の日に始まり、その後は継続的に行われるようになったようです。しかし大正四(一九一五)年からは、十一月二十三日に改められ、毎年執行されています。釋奠は、現在の日本で足利学校の外に、湯島聖堂(東京都)、閑谷学校しずたに(岡山県)、多たく久く聖廟(佐賀県)など数カ所の孔子廟で行われているだけで全国的にも珍しい伝統行事です。

この釋奠には、毎年、中国を専門に研究されておられます著名な先生に記念講演をお願いしております。先ほど申しま

したように、今年の釋奠には、本学の石川学長先生にお願いしてございます。昨年は、やはり本学の戸川先生にお願い致しました。

II 孔子とゴータマ・ブッダ

本日は「東洋の叡智」という一寸麗々しい演題でお話することになっていますが、東洋と申しましても、本学並びに足利学校は、中国が主であり、私自身の専門はインドであります。そこで、本日は、孔子とゴータマ・ブッダの教えの中で、東洋の叡智とってよいのではないかと思われる思想を比較しながらお話ししたいと思います。しかし孔子に關しましては、まったくの素人でございますので、この方面のご専門の方が多く中でお話しするようにすべきではなかったかと、後悔致しております。しかし皆様からのご叱正ご教示を得るにはよい機会ではないかと思ひ直しております。

さて、東洋の叡智として、いろいろな思想をあげることが出来るかもしれませんが、本日は中庸と中道、仁と慈悲を取り上げたいと思います。

孔子は、皆様よくご存じのように、紀元前五五二年（あるいは五五一年）に、現在の中国の山東省の曲阜に都した魯という小さな国の昌平郷にある陬という村（邑）に生まれました。足利学校が位置しているのは足利市の中の昌平町で、孔子の生まれ故郷に因んでこの町名がつけられています。私がかって学び、後になって勤めるようになりました東京大学の前身は、江戸幕府の昌平坂学問所（昌平黌）であります。また中村元先生が創立され、私が現在学院長をしております東京の東方学院の直ぐ近くに、江戸幕府がその学問所として作った孔子を祀る湯島の聖堂があります。東方学院は、この聖堂のお部屋をお借りして、公開講座を行ったこともあります。聖堂にいくとき通る坂道が昌平坂といわれています。このように見てまいりますと、私が足利学校の庠主となったのも、何かの因縁があったのかも知れません。

孔子が生まれて約九十年後の紀元前四六三年ころに、今一人の東洋の生んだ思想家ゴータマ・ブッダは、ネパールの釈迦族の中心地であったカピラヴァットゥ（カピラ城）の国王スッドーダナの長子として、小国とはいえ、物質的には何不自由のない環境の中に生まれました。しかし生まれて七日にして、その母マヤーが亡くなり、精神的にはいわば逆境の中で幼・青年時代を過ごしました。

一方の孔子も、父孔紇は魯の国の名高い勇敢な戦士でありましたが、孔子が三歳の時に亡くなり、貧困と苦難の中に育ち、倉庫番や牧場の飼育係りをしながら、学問に励んだといわれています。

この二人の偉大な思想家は、孔子の方がより苛酷な人生体験をしたかも知れませんが、その生育期には共に逆境を体験しているように思います。「艱難汝を玉にす」と申しますが、この艱難こそが、二人の偉大な思想家を育てたのかも知れません。

孔子は、政治を志し、理想の政治を実現しようと大変な努力をいたしました。他方、ブッダは、政治も家も妻も子も捨てて出家し、真実の自己の実現に大変な努力を致しました。この二人の思想家の思想も、生き様も、非常に異なっております。しかし一致して強調していることがございます。それは孔子の言葉を借りれば「中庸」であり、ブッダの言葉を借りれば「中道」であります。

Ⅲ 中庸と中道

『論語』の中で、孔子自身が、ただ一回だけ、「中庸」について言及しております（「雍也篇」）。「中庸の徳たるや、其れ至れるかな。民鮮きこと久し」といっております。すなわち「中庸は最高の道徳的価値だ。しかし人々はもう長いことそれを忘れていく」という意味であると理解しております。孔子はここで、一方では中庸を最高の価値であるといつて賛嘆

しております。しかし他方では、中庸が民衆の間でもう長い間守られなくなってきているとあって、慨嘆しております。

また『論語』では、孔子自身ではなくて、古代の聖王である堯が、その帝王の位を舜に譲るに当たって、舜に「ああ、なんじ舜よ。いまや天命は汝の上に下った。中庸を守って誠実に政治を行え」と告げたと言われています。そしてその舜もまた、帝王の位を禹に譲るときに、同じこの言葉を禹に授けた、と述べられています（『堯曰篇』）。

いまお話ししましたように、『論語』では、孔子は中庸を最高の道徳的価値として高く評価し、また堯という王も、舜という王も、中庸を、王たるものが国を治めるのに守るべき最重要な徳目であると考えていたと述べられています。しかし残念ながら、この孔子の言葉にしても、堯と舜の言葉にしても、その中庸の内容については何も説明されておりません。

その内容を知るには、『論語』の中で孔子が用いている「中行」という言葉が参考になります（『子路篇』）。中行は中庸と同義語であると解されています。孔子は、友を選ぶなら、「中行の人、すなわち中庸を行く人と交わりたい」と言っております。しかしもしそのような理想の人物がいなければ、「狂者」か「狷者」と交わりたい、と言っております。狂者という言葉の意味は、「乱暴で心のよこしまな人」を意味するかと思えます。狷者は、「自分の意志を曲げず、かたくなな人」を言うのではないかと思えます。

なぜ孔子は、このような一般的には変人として歓迎されない人物と交わりたいと望むのでしょうか？ 孔子はこのような人を選ぶ理由を、狂者は「進取の気性があって、積極的に進んで求める」し、他方狷者は、「消極的で控えめで、やるべきでないことは決してやらない」からであると述べております。

このことから、孔子の考えている中庸とは、積極的な狂者と消極的な狷者との中間の道を示唆しているように思われます。正しい真実の道は、両極端にあるのではなくて、その中間にあるというのだと思えます。これが中庸の意味するところだと思えます。

このことは、『論語』にある孔子の言葉「過ぎたるは猶及ばざるがごとし」（先進篇）と言う名言を思い起こさせます。この名言は、孔子の門人の一人子貢が、同門の子張と子夏とを比べて、どちらが優れているかと孔子に尋ねたとき、孔子は「子張は度が過ぎており、子夏は度が足りない」と答えました。そこで子貢が「それでは、子張の方が優れているのですね」と尋ねたところ、孔子は「そうではない。過ぎたるは及ばざるがごとし。過ぎると言うことは、必ずしも善いことではない。及ばない、足りないのと同じだよ。」と答えたのでした。すなわちある目的地に行く時に、車を飛ばしすぎて、目的地よりも十キロ先までいってしまったとすると、そこまで到着できないで、十キロ手前にいるのと同じだということです。重要なことは、目指す目的地に到着することなのです。このような中庸の考え方は、前五世紀の子思の作と伝えられている『中庸』に継承されています。

孔子が生まれて約九十年後の紀元前四六三年ころに、今一人の東洋の生んだ思想家ブッダが、現在のネパールに生まれました。ブッダの言行を伝えている律蔵の中の「小品」によれば、ブッダは、自分の過去の経験に照らして、修行僧が近づいてはならない二つの極端な道があることを指摘しています。一つは欲情に駆られて官能的な快樂にふける道です。今一つは、逆に極端に禁欲し、自分の身をいたわずらに苛め苦しめる苦行の道です。

ご存じのように、二十九歳のとき、ブッダは第一の快樂の道を捨て、妻子と別れて、反バラモン教的な、沙門と呼ばれる自由思想家たちの一人となり、六年間極端な苦行に専念しました。しかしついにさとることが出来ませんでした。苦行の道は、苦しいばかりで、悟りにとっては無益なことであることに気付き、ブッダはこの道もまた捨てました。そして、「中道」を見出したのでした。

「中」というのは、相互に矛盾対立する二つの極端な道のいずれからも離れた自由な立場を意味しています。中は二つのものの単なる中間ではなく、二つのものから離れ、矛盾対立を越えることを意味しております。「道」は実践・方法を意味

しています。

ブッダは、快樂主義と苦行主義のいずれにも偏らない「不苦不樂の中道」の実践を勧めました。それは具体的には、八つの正しい道（八正道）、すなわちつぎの八つの実践徳目であります。

①「正しい見解」（正見）——真理に関する知識を意味し、具体的には、後に説かれる四つの真理（四諦）のひとつひとつに関する知のこと。

②「正しい考え方」（正思）——煩惱をはなれる、怒らない、傷つけ害しない、という三つの思いのこと。

③「正しいことば使い」（正語）——虚言、そしる言葉、荒々しい言葉、ざれごとを止めること。

④「正しい行為」（正業）——殺生、盗み、愛欲に関するよこしまな行いを捨てること。

⑤「正しい生活」（正命）——正しい生活法になつた衣・食・住のこと。

⑥「正しい努力」（正精進）——まだ生じていない悪は生じないように努力すること、すでに生じた悪はこれを断ずるよう努力すること、いまだ生じていない善はこれを生ずるように努力すること、すでに生じた善はますます増大するように努力すること。

⑦「正しい思念」（正念）——身体・感受作用・心をよく観察し、熱心で、気をつけ、さらに気づかい、世間における貪り、憂いを制すること。

⑧「正しい瞑想」（正定）——諸々の欲望を断ち、正しい精神統一の状態にあること。

人間の自然の性向として、富であれ、名誉であれ、権力であれ、どれかの極端に執着し、偏狭になり、他が見えなくなり、一辺にとりつかれ、一辺倒になりがちであります。ブッダの中道は、このような一辺と他の辺との両辺を否定し、超越して行くことなのです。

このような中道は、また調和と相通するものがあります。『律蔵』「小品」(五・一・一二・一五〜一七)に、ブッダと弟子のソーナとの興味深い対話がありますので引用しましょう。

「ソーナよ。そなたはどう思うか？ もしもそなたの琴の弦が張りすぎていたならば、そのとき琴は音声こころよく、妙なるひびきを発するであろうか？」

「尊い方よ。そうではありません。」

「そなたはどう思うか？ もしもそなたの琴の弦が緩やかすぎたならば、そのとき弦は音声こころよく、妙なるひびきを発するであろうか？」

「そうではありません。」

「そなたはどう思うか？ もしもそなたの琴の弦が張りすぎてもいないし、緩やかすぎてもいないで、平等な(正しい)度合いをたもっているならば、そのとき琴は音声こころよく、妙なるひびきを発するであろうか？」

「さようでございます。」

「それと同様に、あまりに緊張して努力しすぎるならば、こころが昂ることになり、また努力しないであまりにもだらけているならば怠惰となる。それ故にそなたは釣合いのとれた努力をせよ。……」

弦の張り方がちょうど調和していることが、中道の比喻として示されています。中道の思想は、この調和に対応しているものといえましょう。

以上見ましたように、孔子の中庸とブッダの中道とは、説明の言葉は違いますが、その意味するところはよく似ている

ことがお分かり頂けるかと思えます。しかしまったく同じであるとは言えません。それはまた中国思想とインド思想の違いでもあります。中庸は、中国思想の現実主義を反映して、この現実的、日常生活上の、あるいは政治上の、倫理道德であるのに対して、中道は、現実生活を超越し、悟りという宗教的目的を達成するための手段であります。

孔子は、弟子の子路から「一体死とは何でしょうか」と尋ねられたとき、「いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らん」、すなわちまだ生も分らないのに、どうして死が分かるかと言って、回答を避けようとしたことは有名です（先進篇）。それに反してブッダにとっては、孔子が避けようとした死を含めた生老病死という四苦の克服こそが人生の一大事であって、その解決の手段が中道の実践であったのです。しかし中庸も中道もこの現実生活における実践倫理として働く限りは、非常に類似しております。

一方、目を東洋から西洋に転じますと、西洋人の考え方を示す形式論理学では、その根本原理の一つに「排中律」がございます。これは第三者排斥の原理ともいわれますが、あるものについて、その肯定と否定とがある場合、一方が真であれば、他方が偽であり、その両方のどちらでもない中間的第三者は認められないという論理法則であります。このような思考傾向が強いからだと思えますが、アメリカなどでは、一寸したことで裁判に訴え、しかも日本と違って裁判の途中で、妥協ということがなかなか行われないと聞いております。一と〇だけのコンピュータの世界ではすむかも知れませんが、人間の世界では通用いたしません。私はよく知りませんが、最近ではファジー理論などが唱えられるようになってきて、やはり曖昧なもの存在を認める傾向になってきているように思います。

IV 仁と慈悲

今一つの東洋の叡智と云える思想として、孔子の「仁」とブッダの「慈悲」を挙げる事が出来るのではないかと思

ます。

孔子の学園で、孔子がその門人たちに教えたことからは、「君子の教養」であったといわれています。君子とは、皆様よくご存じのように、郷とか大夫など身分の高い人、つまり貴族をいいますが、それとともに高い身分や地位に相応しい美徳や深い教養などを持っている人、すなわち人格のすぐれた人をも意味致します。孔子は門人たちに、君子たれ、と教えるに当たって、種々の徳目、すなわち仁、恕、忠、信、孝などを示しました。それらの中で最高の徳目として重視したのは仁でありました。「君子、仁を去っていつくにか名をなさん」(『論語』「里仁篇」)と言って、君子は如何なる時にも、片時も仁を離れては君子たり得ない、とまでいっております。

その仁とは、何か、という、いく人も弟子の質問に対して、孔子はさまざま異なった説明を与えております。しかし樊遲という弟子の問いに対して、孔子は、仁とは「人を愛する」ことであると説明しております(『顔淵篇』)。しかしこの仁は、恕、忠、信、孝などの個々の美德の総和、換言すれば完成された君子の円満なすべての徳を意味し、さらにいえば完全な「人間らしさ」を仁と言ったようであります。その人間らしさの諸要素の中、最も中心的で重要なものを「人に対する愛」であると考えた、といわれています。

仁とは、別の言葉で言えば、「忠と恕」であるとも説明されています。「忠」というのは、今日では「君主に対する忠誠」を意味しますが、孔子の場合には、そうではなくて、「人に対して、己のまごころを尽くすこと」を意味しております。また「恕」は、人に対する「思いやり」で、真心から、温かく人を推し量ることとされています。「己の欲せざる所は、人に施すなかれ」(『衛霊公篇』)ということであり、また「他人のことをわが身に引き当てて考えられる」(『雍也篇』)こと、それが恕であるといわれています。最高の徳である「仁」は、他の宗教で見られるような神の命令と言った厳しいものではなくて、人間の真心とそれにもとづく思いやりの情を基礎にしております。

他方、ブツダは、「慈悲」を強調致しました。慈悲の「慈」(maitri)は、語源的には「友情」とか「親愛の情」を意味します。通例、仏教用語としては、友人に利益と安樂をもたらそうと望むこと、すなわち「与樂」であると説明されています。「悲」(karuṇā)とは、「哀憐」とか「同情」を意味します。通例、仏教用語としては、友人から不利益と苦とを除去しようとする事、すなわち「抜苦」であるといわれています。慈悲もまた、仁と同様に、神の命令というようなものではありません。

このように見て参りますと、孔子の忠は、ゴータマ・ブツダの慈に、孔子の恕は、ゴータマ・ブツダの悲に、かなり近いことが分かって参ります。

あたかも、母が自分の一人子を命をかけても護るように、そのように一切の生きとし生けるものどもに対しても、無量の「慈しみ」のこころを起こすべきである。(『スッタニパータ』、一四九)

このように、ゴータマ・ブツダは、ちょうど母親が身命を賭して、自分の一人子を守るときのごとき純粹な愛をもって、一切の生きとし生けるものを愛すること、すなわち慈悲の実践を強く勧めております。しかし孔子の仁と仏教の慈悲との大きな違いは、孔子の仁は人間の間の愛であるのに対して、ゴータマ・ブツダの慈悲は、人間の間の愛ばかりではなく、一切の生きとし生けるものに及ぶ愛であると言うことであろうかと思えます。

昔は母親の愛情は、純粹な愛情の代表のように思われてきましたが、どうも最近では、保険金目当てに、我が子を殺す母親も出てくるようになり、「母が自分の一人子を命をかけても護るように」というような譬喩が使えなくなる日が来るかも知れない、と憂慮いたしております。

中村元先生のお墓は、東京の多磨墓地にあります。そのお墓には、先生が仏典『スッタニパータ』から訳され、それを奥様がお書きになった墓碑が建っています。それには「ブツダのことば」と題して「慈しみのことば」が刻まれております。

一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穩であれ、安樂であれ。

一切の生きとし生けるものは幸であれ。何びとも他人を欺いてはならない。

たとどこにあって他人を軽んじてはならない。

互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。

この慈しみの心づかいをしっかりとたもて。

若いころから最晩年に至るまで仏教の説く「慈悲」の精神を大切にしてこられた中村先生は、

仏教では、「無我を説く」と申します。無我というのは、……我執を離れよということなんです。……人間におけるわがものという観念を捨てて、ここを統一し、哀れみに専念する。我執を離れたところから、自ずからもろの美德が出てくるわけです。そのもろもろの美德というものは、人間の色々な美德がありますが、それは究極的には慈悲であるということです。（『温かなころ—東洋の理想—』春秋社）

と、このように慈悲こそ人間の永遠の真理であることを強調しておられます。

Ⅲ むずび

そろそろ締めくくりたいと思います。

さて、三年前の九月十一日、私は、あの日ちょうど京都の、ある大学の集中講義にいておりました。京都のさるホテルで、二機の旅客機がつつぎと、あの高いツインタワーに激突し、一つまた一つとあの巨大なビルが嘘のように二、三十分の間に画面から消えてしまった、あの信じられないような光景が今も鮮明に記憶に残っております。

私は、過去の二十世紀は戦争の時代であったとすれば、来るべき二十一世紀は、共生の時代であろうと、三年前の九月十一日までは考えておりました。これは恐らく私だけではないと思います。少なくとも日本の多くの方々は、共生の時代ではないとしても、共生していくべき時代であると感じておられたと思います。

しかしあの九月十一日に同時多発テロが、突如としてニューヨークで発生して、すっかり世界は変わってしまったといわれていますし、実際、私もそのように思います。何か二十一世紀もまた、共生どころではない、世界のあちこちでテロが続発し、血塗られた世紀となるかも知れないという、忌まわしい予感が走り、まことに暗澹とした気持ちになりました。

今や人類は、アメリカ一國主義の時代を迎え、否応なく、善か悪か、二者択一の、何れかの道を選ばざるを得ないような状況に置かれております。このような時代であるからこそ、東洋の誇るべき叡智である、孔子が重視した「中庸」、ブッダが説いた「中道」の今日的意義を強調する必要があるように思います。

さらにまた「目には目を、歯には歯を」という、紀元前十八世紀ころ、バビロン第一王朝の王ハンムラビによって制定された法典に見られる、この報復を是認し、正当化する、おぞましい思想が全世界を覆いつつある今日こそ、東洋の孔子の仁の徳を、仏陀の慈悲の精神を、いかに強調しても強調しすぎることはないと思います。

ここで最後に一言付け加えさせて頂きたいがございます。

昔、新羅の国の元暁（六一七一六八六）という大変に優れた仏教僧が、義湘というもう一人の仏教僧と一緒に唐に留学することになりました。二人は旅の途中、ある夜、墓場で野宿をいたしました。そのとき喉が渴いてちょうどそこにあった器の中の水を飲みました。ところが翌朝、目が覚めて、その器が人間の髑髏であったことが分かり、髑髏の中の水を飲んだことにはっと気づき、急に吐き気をもよおしました。このとき元暁は、知らないで美味しく飲めた水も、ひとたび髑髏の中の水と分かると、途端に吐き気をもよおし、もはや飲むことが出来なくなったのは、一切のものが心によって生ずるからである、と悟ったと伝えられています。

今日、科学技術創造立国というスローガンが声高に叫ばれております。そのために、日本の教育、とくに大学教育において、日本の将来を担う青年たちの心の教育に必須不可欠な哲学・倫理学・宗教学・文学などのいわゆる人文科学がないがしろにされております。科学技術は決して万能ではありません。科学技術は、人間はいかに生きるべきであるか、などということとは教えてくれません。科学技術が対象としているのは、物質の世界であって、心の世界ではありません。心の世界を対象とするのは、宗教であり、哲学であり、倫理学であり、人文科学の諸学問です。科学技術は、髑髏の水を美味しく飲ませこそすれ、心の目覚めを起こさせるものではありません。近年顕著な道德の荒廃の一因は、人文科学の衰退に由来するのではないかと思えます。しかし心の教育には、科学技術の教育のように、目に見えるような成果を期待することとは不可能です。そのために即効性・功利性・経済性・利便性などに価値をおく現代社会においては、心の教育は等閑に付されがちです。

しかし科学技術の教育は必要がないと言っているわけではありません。科学技術の教育も人文科学の教育も共に必要なのです。偏食は身体の健康によくないように、科学技術の偏重も心の健康によくないのです。現在のように、科学技術のみ

の偏重は避けるべきであると言っているのです。清らかな心の科学者は、髑髏の水のようなクロールン人間や地雷や原子爆弾などを喜んで作ろうとは決して思わないでしょう。

今日が、科学技術偏重の時代であるからこそ、三島中洲先生が、漢文学と国文学を二本の柱として東洋学の確立を目指して創立された二松学舎大学の存在は、心の教育のメッカとして、その存在の意義はますます大きなものがあると確信しております。二松学舎大学並びに二松学舎大学人文学会のみますますのご発展を念じ上げております。

ご静聴有難うございました。